

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 Ernest Hemingway and East Asia:

Japanese and Chinese Influences on His Writings

(アーネスト・ヘミングウェイと東アジア—日本と中国が作家と作品に与えた影響)

氏名 柳沢 秀郎

論文内容の要旨

本論文は、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway: 1899-1961) がその作家人生において、東アジア、特に日本と中国からどのような影響を受け、またそれがどのように彼の文学作品に反映されているかを検証する試みである。

複数の国家と民族が世界規模で交錯した時代に生きたヘミングウェイの人生およびそこで醸成された彼の文学作品は、当時の日本および中国とさまざまな接点を持っていた。例えば、日本が開国より推し進めていた近代化政策の延長線上にある日露戦争、日中戦争、太平洋戦争のすべてにヘミングウェイは関与し、また、移民をはじめとする東アジアからの人の流れは、ヘミングウェイがその生涯において日本人や中国人と遭遇する機会を提供した。

本論文の目的は、20世紀前半における東アジアの戦争とそこから流れる人の移動にフォーカスを当て、当時の日本と中国の文化、政治、および事象からヘミングウェイがどのような影響を受け、その経験をどう創作に生かしたのかという、ヘミングウェイと東アジアとのトランスナショナルな影響関係について明らかにすることである。

そこで、序章では近現代の東アジアにおける戦争と移民とに焦点を当てて、ヘミングウェイと日本および中国との伝記上の接点を年代に沿って記述した。ヘミングウェイの母国アメリカの東アジアに対する欲望の眼差しは、彼が誕生する1899年にも認められる。それまでヨーロッパ諸国と日本がほぼ独占していた中国市場に対してアメリカは「門戸開放」を唱え、その後アジア進出に欠かせない太平洋の覇権を巡り、日本に対する対立姿勢を鮮明にしていくことになる。中国での権益や太平洋の覇権を巡るこの日米の対立関係は、東アジアとの接点をヘミングウェイに提供することになる。例えば、アメリカ合衆国が日本への警戒感を本格的に強めたと言われている日露戦争に幼きヘミングウェイは関心を示したとされ、また彼は、自身が戦場に赴いた第一次大戦、自ら訪中までして報道した日中戦争、随所で言及している太平洋戦争（第二次大戦）など、日本の近現代史に刻印されている一連の戦争とさまざまな繋がりを持つ。これらは *Men at War: The Best War Stories of All Time* (1942) の序文などで明らかにしているヘミングウェイの戦争哲学に深く関係し、また戦争作家、ジャーナリストとしてのヘミングウェイの執筆に影響を与えてきた。

一方で、東アジア地域からの移民は、中国系や日系の移民と出逢う機会をヘミングウェイに提供した。それはヘミングウェイがキューバで雇っていた中国人コックやヘミングウェイに釣りを教えたとされるキューバに移住した日本人漁師などについての伝記的資料が伝えている。序章ではこうした伝記的事実を、キューバのヘミングウェイ博物館でおこなった蔵書の調査結果を踏まえながら記述する。ヘミングウェイが所有していた日本や中国に関する蔵書にはページ欄外に「書き込み」が施されている場合があり、それらにも触れながら、ヘミングウェイと東アジアの関係を通史的に辿り、本論文の第1章から第5章で示したヘミングウェイと東アジアにまつわる文学論および作家論の枠組みを提示した。

第1章では、ヘミングウェイ初期の長編『武器よさらば』(1929)をとりあげ、作品の背景である第一次大戦の戦争構造に深く関与する同盟や密約に焦点を当て、当時の日本とアメリカとの間で繰り広げられていた太平洋の覇権を巡る確執が作品中の日本への言及と関わることを論じた。作品中では直接言及されていないこの帝国主義的確執は主人公フレデリック・ヘンリーが作品中で展開している日本批判に反映されているが、一方、日本は「連合」側について大戦に参加していた。ここに、アメリカ人としてのナショナリズムと「連合」の連帯のはざままで困惑する若きアメリカ人青年将校フレデリックのジレンマが明らかとなる。連合の脆弱性を暴露するこうしたジレンマは、同じく友軍であるはずのイタリア軍に従軍していながら、イタリア人憲兵に命を奪われそうになるという矛盾とも文脈を共有している。同盟や連合などによって人類が初めて体験した「大戦」に対してあまりにも無知だったかつての自分を「語り手フレデリック」が終戦後の視点からアイロニカルに語るという構図を用いて、ヘミングウェイは第一次大戦特有の戦争不条理を浮き彫りにしたのである。

第2章では『持つと持たぬと』(1937)をとりあげ、作品の背景である大恐慌期のアメリカとそのアメリカ本土への「中国人密航者の流れ」に焦点を当てることで、アメリカの僻地キーウエストで暮らす貧乏白人ハリ・モーガンの危機的アイデンティティを浮き彫りにする。大恐慌期、アメリカ本土を目指す中国人密航者の数は最盛期を迎える。はるばる太平洋を横断してやってくるこの中国人密航者の流れの途上に、シンのような中国人密航ブローカーがはびこっていたキューバがあり、次いで中国人が“Chinks”と蔑まれていたキーウエストがある。そして小説には描かれていない、作品世界の外部にあるアメリカ本土へと伸びるその流れの末端には、中国人密航者たちが目指した救済の地、チャイナタウンが築かれていて、白人富裕層たちのエキゾチズムの欲望を満足させるスラミング型観光スポットとして、大恐慌下のアメリカで独自のオリエンタリズムを発信していた。実は白人富裕層がチャイナタウンに向けていたこのスラミング的欲望の眼差しは、『持つと持たぬと』の主人公モーガンたちキーウエストの住人にも向けられる。つまり、『持つと持たぬと』には、アメリカ社会において人種的優位にあるはずの白人たちがチャイナタウンの中国人同様に観光資源化されていく様子が描かれている。テキストの外部へと続く中国人移民の流れを読み込むことで、テキスト内部のアジア表象はスラミングという観光形態と関連付けられ、またモーガンにとって中国人は白人を上位に据えるアメリカの人種ヒエラルキーを脅かす存在として描かれていることが明らかになるのである。

第3章では訪中経験がヘミングウェイにもたらした作家哲学への影響について検証する。そこで東アジアにおける日本の植民地主義政策に起因する日中戦争を巡ってヘミングウェイが関与した親中プロパガンダと米国の諜報活動に焦点を当てる。訪中に際し、ヘミングウェイは、アメリカ側から諜報活動への貢献を期待されていた。しかし『中央宣傳部國際宣傳處工作概要（二十七年迄三十

年四月)』と題された中国国民党の機密文書からは、ヘミングウェイを含め訪中した外国人たちの多くが「国際友人」と呼ばれ、国民党に有利なプロパガンダの協力者であることを期待されていた事実が明らかになる。しかしながら、国民党政府関係者の資料を紐解くと、ヘミングウェイは俗に「チャイナラバーズ」と呼ばれる親中外国人たちとは異なり、むしろプロパガンダに左右されない平等な視点が評価されていることがわかる。親中プロパガンダへの貢献に乏しかったためか、ヘミングウェイは結果的に国民党関係者の記憶から消えていくことになるが、訪中経験から間もなくして編まれた *Men at War* の序文の中で、ヘミングウェイはプロパガンダに対して作家が取るべき態度を明文化することになる。この東アジアで起きた戦争に関わることによって、ヘミングウェイは一作家でありながら諜報活動とプロパガンダに関与することになり、同時に作家として提唱していた「反プロパガンダ」の姿勢を再確認する機会を得ることになるのである。

第4章では冷戦小説『河を渡って木立の中へ』(1950)を取り上げ、ヘミングウェイ自身が戦争史の分岐点として意識していたヒロシマ・ナガサキという出来事、つまり「核の時代」の到来が、戦場を好んで描いてきた「戦場作家」としてのヘミングウェイにとってどのような意味を持っていたのかを明らかにする。伝記や書簡に認められるヘミングウェイの「核」に対する言及は常にジョークの形でなされ、同様に『河を渡って木立の中へ』の主人公リチャード・キャントウェルも核兵器をジョークに絡めて言及している。両者に共通して認められる、この「核のジョーク」はヒロシマ・ナガサキ以降、戦争から失われた戦場の儀式性に対する老軍人キャントウェルの悔恨の表象であり、また、戦場に赴く価値を見いだせなくなった戦場作家ヘミングウェイにとって、核の時代が過酷な現実であることを逆説的に示す表象でもある。過酷な現実を前に「ユーモア」が感情の節約で対処するのに対し「ジョーク」はアイロニーを用いて現実を過小評価するというフロイトの説を借りれば、ヒロシマ・ナガサキがヘミングウェイに与えた影響が顕在化する。なぜなら、「死の博物館」や『午後の死』に顕著なハードボイルド・スタイルに認められるユーモアはまさにこの感情の節約から生じており、一方、ヘミングウェイ独特のスタイルを欠いていると不評をかった『河を渡って木立の中へ』にはキャントウェルの痛々しいジョークが散見されるからである。ヒロシマ・ナガサキはハードボイルド・スタイルを駆使して彼が好んで描いた人間の死を戦場もろとも奪い、結果的にヘミングウェイを戦争から遠ざけることになる。ヒロシマ・ナガサキは戦後のヘミングウェイが戦場小説ではなく冷戦小説を書かざるを得なかった要因の一つであり、その意味で『河を渡って木立の中へ』はヘミングウェイ自身にとっての「戦場喪失の追悼」の物語なのである。

第5章では、未公開原稿を増補された『移動祝祭日—修復版』(2009)と遺作『エデンの園』(1986)の草稿を取り上げ、人種・民族の越境が活発化していたモダニズムの時代に、その中心的舞台である20世紀初頭のパリに生きた若きヘミングウェイの日本人との出会い、その出会いがもたらした芸術家としてのアイデンティティへの影響、および、その経験が『エデンの園』の創作に関与したことを論証している。まだジャーナリストであったヘミングウェイは、1920年2月にパリで、芸術を志して当地に滞在していた日本人画家たちと出逢う。『移動祝祭日—修復版』には、ジャーナリスト業界では許されなかった長髪を帯びた彼らの容姿を芸術家のシンボルとして憧憬するヘミングウェイの様子が描かれている。その後ジャーナリスト業と決別する際に、記者仲間が批判していた長髪姿に自身を変容させることで創作に専念できる環境を実現し、同時に妻との倒錯行為を行う。具体的には妻の勧めでヘミングウェイは長髪同士で夫婦関係を営む。この『移動祝祭日—修復版』と同時期に手掛けていた『エデンの園』の草稿には、編集段階で削除されてしまった画家ニック・シェルドンとその妻が存在し、物語の中で二人は、『移動祝祭日—修復版』で初めて公表された若きパリ

時代のヘミングウェイ夫妻の倒錯行為をモデルにしたかのように、妻の相似願望に応えようと夫ニックが髪を伸ばす。この物語の中で断筆中の作家デイヴィッドは、長髪の画家ニックとの2月末のパリでの出逢いが刺激となり、この日を境に創作活動を再開する。つまり「2月のパリでの長髪の画家との出逢いが一人の作家にもたらした作家アイデンティティの回復」という展開が『移動祝祭日—修復版』と『エデンの園』の草稿に共通して認められるのである。このことから、両作品を同時期に手掛けていた晩年のヘミングウェイは、若きパリ時代の記憶を基に、妻の相似願望に応えようと長髪を試みていた自分自身を『エデンの園』の草稿のニック・シェルドンに投影し、さらに自分の作家人生を後押しした日本人画家たちの役割をもニックに担わせ、長髪の画家として主人公デイヴィッドと出逢わせることで、デイヴィッドの作家復帰に関与させたと考えられる。つまり、トム・ジェンクスによって大規模な修正が施された『エデンの園』は、本来日本人がそのプロットに大きく関与した作品だったのである。

東アジアの近現代史において重要な位置を占める日本および中国が関わった戦争、およびこの時代に生きた日本人や中国人たちの存在は、さまざまな時と場所でヘミングウェイの人生と接点を持ち、作家およびジャーナリストとしてのキャリアに影響を及ぼしてきた。こうした東アジアとのトランスナショナルな関係もまたヘミングウェイ文学に深く関与していたのである。